

# 「邪馬台国論」

- 邪馬台国の探し方  
(位置・距離・方位だけでない探究の要件)

2020年3月27日

丸地 三郎

## 「邪馬台国の探し方」

- 位置・距離・方位だけでない探究要件
  - ✓ 距離・方位で邪馬台国を、300年、探してきたが、見つからない。
    - 何を考慮しなければいけないのか？
    - どんな要件を満たしたら、その位置が目的地と認められるのか。
  - 良く調べ、素晴らしい洞察力が有っても、邪馬台国は見つからない。
    - なぜ、この人たちが、探せなかったのかと残念に思うケースがある。
- 探し出すための要件を見直してみること、必要と考えます。
- 下記の項目について、提言
  1. 魏志倭人伝とその他の「中国史書」の倭人伝・倭国伝の関係
    - 邪馬台国 VS 邪馬壹国
  2. 魏の公式使節
    - 倭国の対応・待遇 ・ 公式使節の規模/人員
  3. 「王宮に行かず、王に面会しなかった」論…… 有り得るのか？
  4. 船舶・運輸・旅程の常識
  5. 古地図
  6. 人口推定
  7. AB二か所で同一物件発見 何と理解するか A⇒B B⇒A
- 課題
  - 唐津上陸説に根拠は有るのか？
    - 九州上陸地点は何処か？

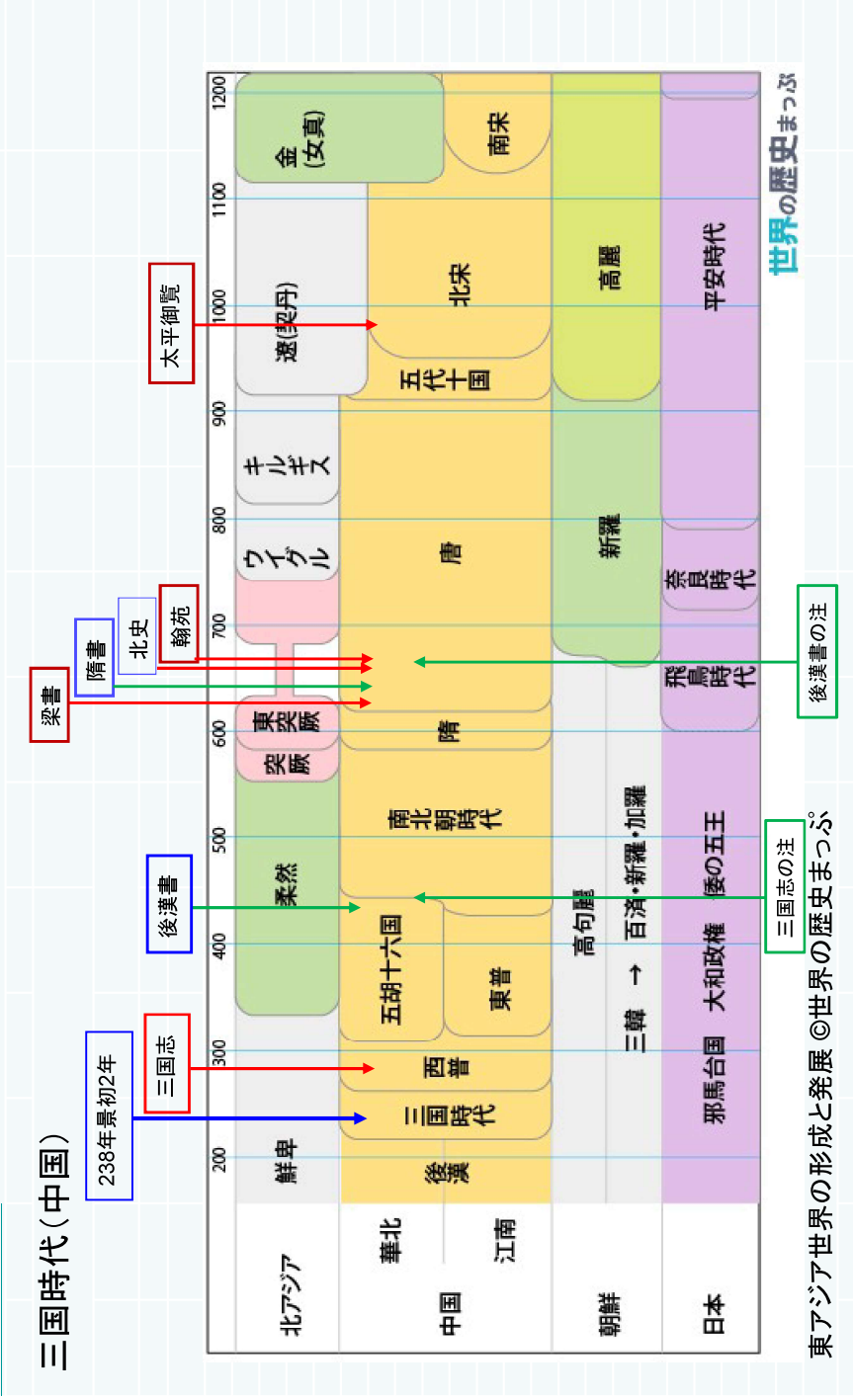
# 1. 魏志倭人伝と外の倭人伝・倭国伝

- 魏志倭人伝の評価が高い理由は、著者：陳寿の優れた記述に加えて、
  - ① 魏の公式の使節が訪問し、その報告書をもとに記述された。
  - ② 専門知識を持った植物・動物・地理・社会学などのプロを同行させ組織的な訪問記録とみられる事。
  - ③ 更に、複数年、倭国に滞在した帯方郡の張政の報告書も、記述の裏付けとなっている。
- 呉との最終抗争の中で、外交戦略上、倭国の情報を必要としていた魏の国策がそのバックにある。
- 魏志(三国志)後の倭人伝・倭国伝(後漢書・宋書・梁書・隋書など)は、何に基づいて記述されたか？
  - 倭の五王の朝見などの使節からの情報が有った可能性もあるが、それは、限定的情報とみられる。
  - 600年から遣隋使が始まり、630年に遣唐使が開始する。従って、梁書・隋書は、その使節からの情報を入手できた可能性はあるが、その情報収集は、やはり、限定的と考えられる。
  - 後漢書の場合、新たな有力な日本情報は無かったと推察する。
    - 倭国乱の時期を桓・霊の間(146年 - 189年)と具体的に記述しているが、情報の入手先は疑問で、陳寿の不採用とした史料を見たのか、著者の単なる推察なのかも不明。信頼性は無い。
  - 宋書の倭国伝は、倭の五王の朝見記録等から記述したもので、邪馬台国時代の記述は無い。
  - 梁書は、魏志・後漢書の引き写しと思われるが不正確。誤字多し。猟奇的な内容を含み信頼性無し。
  - 隋書は、魏志(三国志)・後漢書を参照したのは明らかだが、中国の未開地に対する偏見をそのまま記述し、信頼性は無い。

- 三国志(魏志倭人伝)以降の中国史書の邪馬台国に関する記述には、信頼性が無く、魏志倭人伝と異なる情報が記された場合には、その情報は信頼できない。
  - 魏志倭人伝と異なる情報を根拠にする場合には、別途、情報の信頼性を評価が必要。『史料批判』
- 裴松之(372年 - 451年)の注釈も、同様なことが言える。
  - (魏略曰 其俗不知正歳四節 但計春耕秋收 為年紀)「魏略いわく、その習俗では正月(陰曆)や四節を知らない。ただ春に耕し、秋に収穫したことを数えて年紀としている。」これも「中国の未開地に対する偏見」で、陳寿の採用しなかった文言を、魚豢(魏略の著者)が報告書の中から搜したもののか？

## 各書籍の書かれた時期一覧：三国志は同時代史(陳寿の生きた時代を記す)

<https://sekainorekisi.com/glossary/%E4%B8%89%E5%9B%BD%E6%99%82%E4%BB%A3%E4%BC%88%E4%B8%AD%E5%9B%BD%E4%BC%89/>



# 臺=台 邪馬台国は無かった！ 邪馬壹国だ！ 壹=壹

- 「なかった」論争で有名になった。
  - 話題の「名前」・「呼び方」が違くと、話にならず、大変困る。
  - どちらかに決着がつくことが望ましいが、古田vs安本論争は妙な形で終了し、決着はついていない。困った！
- 現存する三国志(魏志倭人伝)は、1100年代に印刷された版本が複数残る。
  - 百衲本(紹興本) (紹興年間(1131~1162)の刊行) → 共に邪馬壹(=壹)国と記載
  - 慶元本(紹熙本) (慶元年間(1195~1200)の刊本) →
- 魏志倭人伝の中で「邪馬台国」の名称記載は、一箇所のみ。
  - 固有名詞なので、意味・解釈などから判定する基準がないため、誤記が発生したら、誤りを正すことは、一般的には、難しく、不可能。
    - ✓ そこで、現在残された本に邪馬壹国とあれば、『それを正しいと扱うべきである。』 一見、正論に見える。
    - 誤記・転写間違いとする根拠は、何か、有るのか？
- 三国志の魏志倭人伝は、「特別な条件」を持つ書物
  - 特別な条件とは？
    - この後に著述された中国の複数の歴史書(後漢書・梁書・隋書)が、日本に関する記事を書く時に、この魏志倭人伝の文章を書き写した、又は参照している。
    - 更に、個々の歴史書には、別の著者による注釈が加えられおり、その注釈も参考となる。
- このような稀な条件を持つため、この後世の歴史書を調べること、転写・誤記の有無を確認できる可能性を持っている。

## 邪馬「台」・邪馬「壹」：論争

- 邪馬台(壹)国が記述された歴史書(注釈)を、まずは、年代順リストアップする。
  - 陳寿の書いた原本には「台」か「壹」かどうかは、不明としておく。
- 後漢書の范曄は、陳寿の三国志を見ることができた。そこには「台」とある。
  - 元の文献(魏志)は、「台」であった。と考えるのが自然。
- 梁書は、陳寿の三国志も後漢書も見ることが可能。そこには「台」とある。
  - 元の文献(魏志・後漢書)は「台」であった。と考えるのが自然。
- 隋書は、陳寿の三国志も後漢書も見ることが可能。
  - 「都は邪靡堆、魏志の説に則れば、邪馬臺というなり。」とあり、この時の魏志では「台」であったことを記している。(邪靡堆の堆は台と同一発音:タイ)
- 従って、隋書成立時(636年)までは、三国志・後漢書・梁書・隋書の全てが「台」であった。
- 後漢書の注に面白い記述が有る。
 

「其大倭王居邪馬臺國(案今名邪摩惟音之訛也)」

その大倭王は邪馬台国に居る

(今の名を案ずると、ヤムユイ音のなまりである)

676年頃に後漢書に注釈を入れたが、この注釈者が、魏志倭人伝の写本に「台」ではない文書を見てこの注釈を入れたと考えられる。

「惟」と同一の発音の文字＝「壹」が記載された三国志の写本を見たと考えるのが自然。

  - この「写本」と同じものが元になって1100年代の2系統の版本が作られたと考えられる。これらの「台」「壹」が無理なく理解できる。
- ◆ 邪馬「壹」国は無かった。 ← これが結論。

年代	著者	書名	邪馬壹国	邪馬台国
280年代	陳寿	魏志(三国志)	?	?
430~440年	范曄	後漢書		台
629年	姚思廉	梁書		台
636年	魏徵	隋書		台
676年	李賢	後漢書の注		壹!!!
1100年代	版本	魏志(三国志)		壹

## 7 『梁書』倭国伝

<http://members3.jcom.home.ne.jp/sadabe/kanbun/kanbun-mokuji.htm>

中国史籍訳文から引用

倭者、自云太伯之後。俗皆文身。去帶方萬二千餘里。大抵在會稽之東、相去絶遠。

倭とは、**自らは太伯の後裔だ**という。俗は皆、**身体に刺青をする**。帯方郡から**一万二千余里**、**おおよそ会稽郡の東に在り、互いに絶海の遠方である**。

\* \*

対馬が無い

未廬国とは違う

從帶方至倭、循海水行、歷韓國、乍東乍南、七千餘里始度一海。海闊千餘里、名瀚海、至一支國。又度一海千餘里、名未廬國。又東南陸行五百里、至伊都國。又東南行百里、至双國。又東行百里、至不彌國。又南水行二十日、至投馬國。又南水行十日、陸行一月日、至邪馬臺國、即倭王所居。其官有伊支馬、次曰彌馬獲支、次曰奴住鞮。

帯方郡から倭に行くには、**海を巡って韓国を経て、東へ南へと航行すること七千余里で、初めて一海を渡る**。海の広さは千余里、名は瀚海、「一支国」に至る。また一海を渡ること千余里、名は「未廬国」。また東南に陸行すること五百里、「伊都国」に至る。また東南に行くこと百里、「双国」に至る。また東に行くこと百里、「不彌国」に至る。また南に水行すること二十日、「投馬国」に至る。また南に水行すること十日、陸行すること一カ月で、「邪馬臺国」に至る。すなわち倭王が居る所である。その官には伊支馬があり、次は彌馬獲支といい、次は奴住鞮という。

民種禾稻紵麻、蠶桑織績。有薑、桂、橘、椒、蘇。出黑雉、真珠、青玉。有獸如牛、名山鼠。又有大蛇吞此獸。蛇皮堅不可斫、其上有孔、乍開乍閉、時或有光、射之中、蛇則死矣。

民は水稲や紵麻の種をまき、養蚕して絹織物を紡ぐ。薑、桂、橘、椒、蘇がある。黒雉、真珠、青玉を産出する。

牛のような獣がおりる、名は山鼠。また、この獸を呑み込むという大蛇がいる。その蛇皮は堅くて叩き切れないが、頭に孔があり、開いたり閉じたりして、時には光を発するのだが、この中を射れば、蛇は死ぬ。

物産略與儋耳、朱崖同。地温暖、風俗不淫。男女皆露紵。富貴者以錦繡雜采為帽、似中國胡公頭。食飲用蠶豆。其死、有棺無槨、封土作家。

物産はほぼ儋耳、朱崖と同じ。土地は温暖、風俗は淫ではない。男女は皆、頭に何も被らない。富貴な者は錦に彩色の刺繡をして帽子とし、中国の胡族の頭装に似ている。飲食には御膳を用いる。その死者の埋葬には棺はあるが槨はなく、土を封じて塚とする

空想の産物？

別の民族では？

8

人性皆嗜酒。俗不知正歳、多壽考、多至八九十、或至百歳。其俗女多男少、貴者至四五妻、賤者猶兩三妻。婦人無姪妒。無盜竊、少諍訟。若犯法、輕者沒其妻子、重則滅其宗族。

人の性は皆、酒を嗜む。俗は歴を知らず、長寿が多く、多くは八〜九十歳、あるいは百歳になる。

その風俗では女が多く男が少ないので、貴者は四〜五妻、賤者でも二〜三人の妻がいる。婦人は嫉妬せず。盗難もなく、諍訟は少ない。もし法を犯せば、軽い罪ならば妻子の没収、重い罪ならばその宗族を滅ぼす。

一夫多妻の理由が具体的に記され、説得力があるが、独自に追記したものであ

漢靈帝光和中、倭國亂、相攻伐歴年、乃共立一女子卑彌呼為王。彌呼無夫婿、挾鬼道、能惑衆、故國人立之。有男弟佐治國。自為王、少有見者、以婢千人自侍、唯使一男子出入傳教令。所處宮室、常有兵守衛。

漢の靈帝の光和中(178-184年)、倭国は乱れ、何年も戦さを続けたので、卑彌呼という一人の女性を共立して王とした。彌呼には夫婿はなく、鬼道を身につけ、よく衆を惑わすので、国人はこれを立てた。国政を補佐する弟がいる。王となつてより会った者は少ない、千人の婢が側に侍り、ただ一人の男子に教令の伝達のため出入させている。暮らしている宮殿には常に兵がいて守衛している。

後漢書の「桓靈間」より年代が具体的に判り説得力があるが、独自意見では？

至魏景初三年、公孫淵誅後、卑彌呼始遣使朝貢、魏以為親魏王、假金印紫綬。

正始中、卑彌呼死、更立男王、國中不服、更相誅殺、復立卑彌呼宗女臺與為王。其後復立男王、並受中國爵命。

魏の景初三年(239年)、公孫淵が誅殺された後、卑彌呼は初めて遣使を以て朝貢し、魏は親魏王と為し、仮の金印紫綬を授けた。

正始中(240-249年)、卑彌呼が死に、改めて男の王を立てたが、國中が服さず、互いに誅殺しあつたので、再び卑彌呼の宗女「臺與」を王として立てた。

その後、また男の王が立った、いずれも中国の爵命を拝受した。

時間軸がそろい、理由も判り、明瞭な記述だが、独自意見では？

得意げな注釈

- 著者の想像を交えた変更を加えた全く信頼性の無い『非一級歴史書』。

## 『北史』倭国伝

倭國在百濟新羅東南、水陸三千里、於大海中、依山島而居。魏時譯通中國三十餘國、皆稱子。夷人不知里數、但計以日、其國境東西五月行、南北三月行、各至於海。其地勢東高西下、居於邪摩堆、則魏志所謂邪馬臺者也。

倭国は百濟・新羅の東南の水陸3千里の大海の中にある。魏の時代に往来する国が三十数ヶ国あった。**倭人は野蛮人で距離を測る里数と云う単位を知らず、日数で計測する。国境は東西で五ヶ月、南北で三ヶ月で各々海に至る。地勢は東に高く、西に低い。ヤマイ即ち魏志の云う邪馬台である。**(丸地記、以降同じ)

又云、去樂浪郡境及帶方郡、並一萬二千里、在會稽東、與儋耳相近。俗皆身、自云太白之後。計從帶方至倭國、循海水行、歷朝鮮國、乍南乍東、七千餘里、始度一海、又南千餘里度一海闊千餘里、名瀚海、至一支國。又度一海千餘里、名末盧國。又東南陸行五百里、至伊羅國。又東南百里、至奴國。又東行百里、至不彌國。又南水行二十日、至投馬國。又南水行十日、陸行一月、至邪馬臺國。即倭王所都。

又、樂浪郡の境及び帶方郡から一萬二千里と云い、會稽の東にあり、儋耳に近い。習俗としては、皆入墨があり、太伯の子孫と云う。帶方郡から倭国へ行くには、海をめぐり行き、朝鮮国を経て、南へ東へ沿岸を進み七千里。始めて大海を渡り、又南へ大海を千里渡る、名付けて瀚海と云い、呑岐国に至る。又、海を千里渡り末盧国と稱す。東南へ陸行五百里で伊羅国、東南に百里城国に至る。東へ百里で不彌国に至る。又、南へ水行二十日投馬国に至る。又、南へ水行十日と陸行一月で邪馬台国に至る。即ち、倭王の都とする所。

漢光武時、遣使入朝、自稱大夫。安帝時又遣朝貢、謂之倭奴國。靈帝光和中、其國亂、遞相攻伐、歷年無王。有女子名卑彌呼、能以鬼道感衆、國人共立爲王。無夫有二男子、給王飲食、通傳言語。其王有宮室樓觀城柵、皆持兵守衛。爲法甚嚴。

漢の光武の時、使節として入朝する者は大夫と自称した。安帝の時に又倭奴国と云う国名で朝貢が行われた。**靈帝の光和年間に、その国は乱れ、相互に攻め、何年も王が居なかつた。卑彌呼と云う女性が居て、鬼道によって民衆を感わす。倭国の人々は、共に、この人を王とした。夫は無く、男子二人が王に食事を持ち、言葉を伝えた。その王宮には物見やぐら、城柵があり、皆、武器をもち守衛する。法律を嚴重に守る。**

魏景初三年、公孫淵文懿誅後、卑彌呼、始遣使朝貢、魏主假金印紫綬。

**魏の景初三年に公孫淵文懿が攻め殺された後に、卑彌呼は始めて、朝貢の遣使を送り、魏主は金印紫綬を授けた。**

正始中、卑彌呼死、更立男王、國中不服、更相誅殺、復立卑彌呼宗女臺與爲王、

正始年間に、卑彌呼は死に、男王が立ったが國中が従わず、更にお互いに誅殺する。再び、卑彌呼の宗女の臺與を立て王とした。

- 北史倭国伝は、南北朝時代(439年 - 589年)の北朝にあたる王朝、北魏・西魏・東魏・北齊・北周・隋の歴史を記している。李大師とその子の李延寿が書き、659年完成か。(梁書の完成629年の後)
- 北史倭国伝は、魏志倭人伝、梁書、隨書を参照し、唐の時代に中国へ来た日本人からも情報を得て、記述したものと云われる。
- 「靈帝の光和年間に、その国は乱れ」は、梁書の「光和中」の表現を若干変更したものだ。
- 景初3年の記述は、梁書の「至魏景初三年、公孫淵誅後、卑彌呼始遣使朝貢」の「淵」の部分の字の「文懿」に変更し、記述。梁書の引き写しと見える。
- 里数の記述、行程など、歴史書から解釈し、自己の判断を加えて記述したもので、更に、信頼性に欠ける。

## 梁書・北史などの信ぴょう性について

- 梁書の倭国伝 (完成 629年)
  - 歴史・風土などの記述は、魏志倭人伝の引き写し。
  - その引き写しの中に、誤記や、想像による誇張や、後漢書からの引き写しが入る。新たな日本との往来による新情報も、有ったと見えない。
    - 梁書の倭国伝に関しては、信憑性は無い。
  - 景初3年の項も、あて推量で、「もっともらしい」理由をつけて、得意げに変更したと思われる。
  - 魏志の記述が、元々景初3年となっていたならば、この「もっともらしい」理由をつけることは却って不自然で。**魏志には2年であったことになる。**
- 北史の倭国伝 (完成 659年)
  - 梁書の引き写しの部分が多く、梁書の信頼性の無さをそのまま受け継いでいる。
- 日本書紀の神功皇后の摂政紀三十九年条に「太歳己未。魏志云、明帝景初三年六月、倭女王遣大夫難斗米等、詣郡、求詣天子朝獻。」とある。
  - この項の景初3年記述は、**死んでいないはずの明帝の3年と記述するなど、宛て推量で記述していること、信頼性の無い梁書や北史などを参照した可能性もあり、景初二年を覆す根拠にはならない。**
- 梁書・北史などは、信頼性に欠け、景初二年を覆す根拠にはならない。同様に、日本書紀も、信頼性に欠け、これも、根拠にならない。

[https://www.ne.jp/asahi/isshun/original/siyo\\_kanen.html](https://www.ne.jp/asahi/isshun/original/siyo_kanen.html)

- 『翰苑』は誤字脱字が多く、また「〇〇曰」と書きながら、引用文が原本と異なっていたり、そのまま鵜呑みにはできない歴史書である。なお、出典は竹内理三『翰苑』(吉川弘文館)による。 2011.09.03

[ 翰苑 ]

[ 魏志倭人伝 版本 ]

魏志曰 倭人在帶方東南 爰問倭地 絶在海中 洲島之山 或絶或連 周旋可五千餘里 四面俱枕海 自營州東南 經新羅至其國也

倭人在帶方東南大海之中 依山島爲國 邑舊百餘國 漢時有朝見者 今使譯所通三十國 從郡至倭 循海岸

景初之辰 恭文錦之獻

魏志曰 景初三年 倭女王遣大夫 難升米利等 獻男生口四 人 女生六人 班布二疋二尺 詔以爲新魏倭王 假金印紫綬 正始四年 倭王 復連 大夫伊聲耜 振邪拘等八人 上獻生口也

景初二年六月 倭女王遣大夫 難升米等 詣郡求詣 詔天子 朝獻 遺使 遣使 將送 詣京 都其年 十二月 詔書 報倭 女王 曰 制詔 親魏 倭王 卑彌呼 帶方 太守 劉夏 遣 使送 汝 大夫 難升 米 次使 都市 牛利 奉汝 所獻 男生 口 四人 女生 口六人 班布 二匹 二丈 以到 汝所 在 踰遠 乃 遣使 貢獻 是 汝之

- ✓ 魏志では景初二年のことです。

使者の難升米と都市牛利という名が混ぜられ、  
献じた班布は二疋二丈(=百尺)となっています。  
以上 東亜古代史研究所 塚田敬草氏のコメント

- ✓ 倭国の項も、違いだらけで、「魏志曰」とは白々しい。少し似た文章で、構文も変更されている。次の魏志曰くの「魏」の字もまず、違う。「親魏倭王」の称号も「新」になっており、人名も似ているがちがいだけ。

- ウキペディアの翰苑の記述:

- 660年以前に対句練習用の幼学書として書かれたとされている。
- ◆ 魏志曰くと書きながら、魏志の文字・内容と異なることを書き連ねた文章は、歴史史料として価値は無い。ウキペディアの「練習用幼学書」が適切な表現と思える。
- ◆ 翰苑を引き、景初3年とした説は、検討にも値しない。

## 太平御覽

- フリー百科事典『ウイキペディア (Wikipedia)』によると
  - 977年から983年(太平興国2-8年)頃に成立した。北宋の太宗(2代)時代、李昉、徐鉉ら14人による奉勅撰。
  - 原典からの引用とは限らず、先行する類書である北齊の『修文殿御覽』(佚書)や、唐代の『芸文類聚』、『文思博要』(佚書)からのいわゆる孫引きであることが多い。
  - 右を見て、すぐに判るように、草立てから、魏志倭人伝とは異なる。
  - 1行目だけを比較すると、すぐに5か所で魏志倭人伝の版本とは異なる部分が見つかる。
  - 倭国乱の時期を「漢靈帝光和中」と梁書の記述が挿入されている。
  - 景初3年とし、その年を「公孫淵死」と、梁書の「公孫淵誅後」と同意の文章を追加。
- ◆ 太平御覧は、その成り立ちからして、正確に原文を写したもので無く、**意図をもって編集した**もの。特に梁書を引いている処も多く、**信ぴょう性は無い**。
- ◆ 従って、太平御覧の「景初3年」は、魏志には元々3年とあったとすると論拠にはならない。

宋槧本『太平御覽』所引『魏志』倭人伝

第一条

魏志曰 倭國在帶方東南大海中依山島爲國百餘小國漢時有朝見者今令使譯所通三十國從郡至倭循海岸  
倭人在帶方東南大海之中依山島爲國邑舊百餘國漢時有朝見者今使譯所通二十國從郡至倭循海岸  
百有餘里其地多山木無良田多菰藿自活躬耕南北土雜又南瀝一瀝一千里名曰瀟瀟至一大國置官另列馬同地方三百里多竹木叢林有三千許家亦有田地耕田不足食方行市糶又渡海千余里至末盧國戶四十浜山海居人善捕魚水無深淺皆能沉沒取之東南陸行五百里到伊都國官曰爾支副曰泄讓舩帆環風有千余戶世有王皆統屬女王帶方使往來常止住又東南至奴國百里置官曰先馬舩副曰卑奴母離有二万余戶又東行百里至不弥國戶千余置官曰多模副曰卑奴母離又南水行二十日至於投馬國戶五方置官曰弥弥副曰弥弥利又南水行十日陸行一月至耶馬台國戶七方女王之所都其置官曰伊支馬次曰弥馬叔次曰弥馬獲支次曰奴佳譚其屬小國有二十一皆統之女王之南又有狗奴國男子爲王其官曰狗石智卑狗孝不屬女王也自帶方至女國万二千余里其餘男子無大小皆號面文身聞其言語自謂太伯之後又云自古以來其使語中國草佞說事或蹲或跪尚手據地謂之恭敬其呼心聲曰噫噫如然諾矣

第二条

又曰倭國本以男子爲王漢靈帝光和中倭國乱相攻伐無定乃立一女子爲王名卑弥呼事鬼道能惑衆自謂年已長大無夫婿有男弟佐治國以婢千人自侍唯有男子一人給飲食自辟出入其居處宮室樓觀城柵守衛嚴峻景初三年公孫淵死倭女王遣大夫難升米等言帶方郡求詣天子朝見太守劉夏送詣京師難升米致所獻男生口四人女生口六人班布二疋詔書賜以雜錦米七種五尺刀二口銅鏡百枚真珠鈿丹之屬付使還又封下倭王印綬女王死大作冢殉葬者百余人更立男王國中不伏更相殺數十人於是復更立男弥呼孝女尊年十三爲王國中遂定其倭國之東渡海千里復有國皆倭種也又有朱中儒國在其南人長三四尺去倭國四千余里又有樂國豐齒國復在其南船行可一年至

## 誤記・転写ミスは：有るのか、無いのか？

- ・ 邪馬台・壹で、転写ミスが有ったことが、明確になった。
- ・ しかし、その外にも誤記・転写ミスがあると、云えるのか？
  - ・ 云う場合には、根拠をしっかりと出して欲しい。
  - ・ **古文書を、転写ミス・誤記、誤判断、知識不足などと、勝手に言い放つ(書き放つ)人がいるが、不遜な行為。** 間違いとするならば、誰もが納得する明確な根拠を示すことが必要。
  - ・ 特に、邪馬台国論では、都合が悪いことは、「間違い」としてきた百年以上の経歴があるが、歴史研究の本質に戻り、理由なく「間違い」と記すのは止めるべき。



だから、邪馬台国論争は終わらないのだ！

- ・ 写本は、ミスが多いのか？
  - ・ 写本には、2種類ある。
    - ・ **公式文書を専門職が行うもの** → 専門職のプライドがあり、ミスは極めて少ない
    - ・ 個人の必要に応じて行うもの → 関心や必要性の少ない部分にはミスが多い。
  - ・ このレベルの写本を引き合いに、「写本にはミスは付きもの」というのは、素人。
  - ・ 台と壹：固有名詞で、一カ所だけと云う「ミスが確認できない」最悪な状態で発生。
  - ・ 二年と三年：専門職が行う写本では、あり得ない。
  - ・ 南と東：ミスでは有りえない。
  - ・ 壹と台与：固有名詞だが、3か所あり、間違いが発生する可能性は稀。壹与が正しい。

## 2. 魏の公式使節（倭国へ二つの使節団）

240年と247年の2回、魏の使節は倭国を訪問した。それは下記のような状況の下で派遣された。

- ・ AD 238年(景初2年6月) 卑弥呼使節(難升米)を帯方郡に送り、朝獻を求めた。
  - 帯方郡太守は都に使節を送り届けた。
  - 同年12月 魏の帝は詔書に卑弥呼を「親魏倭王」とし、金印紫綬と詔書を帯方郡太守に託した。 → **これを魏の使節は持参し、卑弥呼に渡す役割を負う**
  - 金・錦・刀・鏡など財宝は難升米達に渡された。 → 持ち帰り、国中に示し、友好関係を示すこと
- ・ AD 239年(景初3年1月) 魏の明帝が死去(魏書 明帝記による)
  - 同年3月 呉は、海路、遼東半島に派兵、魏の守備隊を破る。(呉志による)
  - (魏の使節の出発が1年遅れたのは、明帝の死去と呉との戦乱が理由)
- ・ **AD240年 帯方郡の太守弓遵は、建中校尉梯儻を使節として、邪馬台国を訪問させた**
  - 卑弥呼に会い、魏の旧帝の詔書・金印と、現帝の詔書と財宝を授けた。**
- ・ AD243年 倭王＝卑弥呼は再び使いを魏に出す
- ・ AD245年 魏は、倭の難升米に黄幢(軍の指揮用の旗)を送り、帯方郡に預けた。
- ・ **AD247年 狗邪國の男王・卑彌弓呼素と不和が報じられ、帯方郡の太守は、張政を送り、詔書と黄幢を難升米に届け、狗邪國との調停を行った。**
  - 卑弥呼が死に、径100歩余りの大きな塚を築いた。
  - 男の王が立ち、國中服従せず、1000人余りが殺戮された。
  - 卑弥呼の宗女壹與13才を王として、収まった。
  - 壹與は朝獻の使節を魏に出し、張政を送った。

## 漢・三国時代の時代の外交使節の概要

魏の使節(240年:梯儁)の使節の人員数・規模・体制は、邪馬台国の研究に際しては、基礎的な情報として、把握する必要があるものと考ええる。その**参考**とするため中国の事例を検討する。

- 漢の時代の例 :
  - BC140~135年 **張騫**(チョウ ケン)の大月氏国へ訪問 **人員100名**
  - BC119年 **張騫** 西域の烏孫へ訪問 **人員300名**  
(1名あたり、馬2頭、牛・羊数万匹、外に贈呈用金銀布帛)
- 三国時代の呉の例
  - 230年:孫権は、二將軍に命じ、**1万人**を率いて、夷州・壹州を探索。
  - 233年 : 二將軍はたどり着けず。(死罪)
  - 233年 : 孫権は、公孫淵を燕王に冊封する**使者(兵1万)**を送る。
- 西域へ砂漠を行く張騫の例では、百人単位、しかし、牛・羊数万頭との記述は、規模としては壮大。
- 同時代の呉の使節は、船舶で移動する使節では、万人の単位。
- 魏の使節の場合は、この呉の例が参考となると思われる。
  - **初回の訪問: 人員は最低でも500名。数千名規模と推定する。**

## 初回倭国へ派遣された使節団の概要を推定する

- 魏の使節は、**新旧の詔書と金印紫綬、更に財宝(贈呈品)**を持ち、無事に相手に授与し、**友好関係を確立し、更に、倭国に関する報告書**を作成し、**確実に戻り、報告をすべき立場**にいた。
  - 安全確保
    - 呉の使節も行けなかった未知の地域の国へ行く
    - 航路の危険、(風・嵐・海流・潮流・浅瀬・岩礁・地図)
    - 航路途中の国々の危険(停泊地の安全、水・食料の補給)
    - 敵の呉及び呉の協力国の襲撃、等
  - 友好関係の構築
    - 人材・贈呈品などの準備(嗜好品・装飾品・音楽・舞踊・衣類等)
  - 情報調査能力・人材の配置
    - 中国の辺境の風俗習慣を知る人材
    - 植物・動物などに精通した人材
- 呉の例(1万人)を考慮し、推定する。
  - その規模は、**使節団として、1千人**
  - **船舶の操船と警護の兵員2千人** **合計人員 3千人**
  - **船群は、100人乗りの帆船を主として、30~50隻ほど**



### 3. 魏の公式使節(正始元年:240年)の倭国の対応・待遇

- 魏の公式使節は
  - 「事あらば、邪馬台国を武力侵攻する」下心があり、偵察を兼ねている。
  - 邪馬台国側は、武力侵攻の基礎データである距離・方位などを把握できないように、留意した。
  - 判り難い道を選び、道案内した。
    - だからと、旅程・距離・方位は判りにくい。
  - 倭人(邪馬台国)から、そんな疑心暗鬼の待遇を受けたのか？
- では、どのような待遇を受けたのか？
  - 外交交渉なので、魏と邪馬台国の双方の動き(記述)をみる必要がある。
  - 卑弥呼の使者が、魏を訪問し、魏の王朝から受けた待遇は、
    - 最恵国待遇**。それ以上かも知れない。
    - 大量の豪華な贈り物を邪馬台国へ送り、それを、人々に示し、渡すようにわざわざ言っている。
    - 魏の王から、親魏倭王の称号とそれを証明する金印紫綬を、直接、女王に渡すための使節を訪問させると宣言している。
  - 邪馬台国側は、
    - 豪華な贈り物を持ち帰り、魏王朝のメッセージと使節来訪予定を伝えたはず。**
    - 魏の公式使節の受け入れ態勢を、国として、検討したはず。
      - 魏志倭人伝の記述を読むと、対馬・舌岐の対応は、島(クニ・村)の中を案内し、生業・暮らし振り伝え、島の長・副官が対応し、島を挙げての対応であったと見える。
        - 後に、狗奴国との紛争の際に、応援を求めた事も、緊密な関係を構築した結果と見える。
    - 邪馬台国側も、最恵国対応を行ったはず。**
      - 魏の使節の訪問が順調に進むように、途中の国々にも、事前の連絡を入れ、準備させたものと理解します。

### 魏の公式使節のコース選定

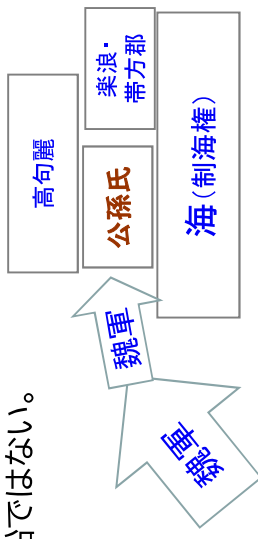
- そのコース取りは、**邪馬台国側が情報提供し**、倭国内は、「最善のコース」を進めたものと見る。
  - 魏にとっては、初めての、未知の国への訪問であった。
  - 500名~数千名規模の公式使節を効率よく・安全に到着させることを念頭に。
  - 邪馬台国側は、水先案内人を付け、先導する船舶を付けたとも推測する。
- 最善のコースとは、どんなコースか？
  - 女王の宮殿が最終目的地
    - 魏の使者の目的は女王への面会と書面・金印などを渡すこと。
  - 最も安全なコース。
    - 魏又は帯方郡を訪問した倭の使節の帰国ルート。
      - 最終到着港は、最も栄えた港。
      - 陸路は、最も整備された、危険の少ないコース。
- ✓ コース設定に際して
  - 魏の使節(帯方郡の役人)とコースについての協議が行われたと見る。
    - 事前に、コースの「距離数」と「所要日数」を伝え、合意を取っていたはず。
    - 受け入れる側の倭の役人にとっても、魏の役人にとっても、成功には欠かせない打ち合わせだったはず。
- ✓ 船舶の航海能力・サイズは、コース取りの重要要素
  - 帆船と手漕ぎでは、到達距離が違う
  - 魏の最も優秀な船舶が選ばれたはず。
  - 船群：大切な任務を持つ場合、1隻では運用しないのが原則。

## 4. 船舶

### 使節の訪問コース選択の要件

- 魏の使節の使用する船舶。
- 一国の公式使節であるため、魏の搭乗船は、魏の最も優れた船舶と考える。
- **魏の北側の海: 黄海を通り、朝鮮半島と更に未知の倭国へ行く最適な船舶は？**
  - 237年(景初1年) 魏は毋丘儉の軍勢を出し、公孫淵を挑発、反旗をひるがえさせた。
  - 237年 青・エム・幽・冀の四州に命じ大いに海船を建造させた。
  - 景初年間 (237年景初1年と推定) 大船で軍を密かに渡海させ、公孫氏に占拠されていた楽浪郡・帯方郡を回復。東側から公孫氏を抑えた。
    - 景初中、大興師旅、誅淵、又潛軍浮海、收樂浪、帶方之郡
  - 238年1月 魏の司馬懿仲達が公孫淵討伐に出兵
    - 高句麗は、魏の要請に応じて数千の兵を派遣(東夷伝)
  - 238年8月の公孫氏を討伐。
- その海船は、北の海で、外洋航海できる最も優れた船だったと考える。  
(勿論、手漕ぎの船は有りえず、大型の帆船となる。)

- 魏の使者は、絶対に、倭の使節の船に同乗させてもらうことは無い。
- 倭国の船は、もちろん帆船であった。手漕ぎの船ではない。



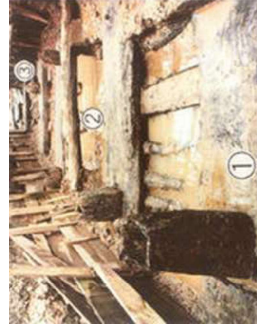
### 舟・船は遺物として残ることは少ない

- 古い船の遺物は、残らない。
  - 発掘された舟・船の古いものは、ほとんどが丸木舟。
    - それが、準構造造船となり、構造船と進化したと云われる。
      - 進化した船の材料は、保存が難しくなり、水中で朽ちてしまう。
  - 3万5千年以上に伊豆の神津島から黒曜石を持ち帰った舟は、出土していない。
  - 古代に丸木を削りだして舟を作った専用の石器(舟の原型石斧)は、14000年前の沖縄で出土。
    - 九州に伝播し、9000年前に火山爆発で、生活基盤が失われ、石器の形状は変形し、日本各地へ伝播。
    - 日本海側の京都付近で、縄文前期(12000年~)の出土が2例あるが、次の時代は3000年前の縄文晩期。
  - 古い舟は、遺物として残ることは稀。
- 魏の使用した帆船の図面も無いし、絵図もないため、実際のサイズ船型などは判らない。
  - ✓ 船自体の遺物では無く、別の方法から探り出すことが必要。
  - 魏よりも前の時代: 秦の時代の造船所の遺跡が、造船の後進地帯の南方の広州で出土。船長30m規模の船舶用の造船所。
  - 造船の先進地帯の山東半島に近い四州で、後の時代に作られた船は、どのレベルか？

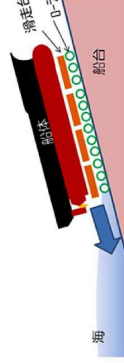
## 秦時代の造船遺跡

- 1997年に廣州市中山四路市で秦王朝造船所を発掘。
  - 造船所は灰黒色の堆積粘土層の上に建てられており、
    - 北東南西方向に平行に配置された3つの木製造船所と木材加工工場が並ぶ。
    - 船台の構造は、
      - 滑走台を形成する大きな厚い板(クスノキ)の2つの平行な列で構成されています。
        - (板は幅60cmから75cm、厚さ15cmから17cm)。
        - 枕木(杉や葦の木)が下に置かれています。(形状は現代の鉄道のよう)
        - 幅8m、長さ30m、50-60トンの木造の船舶が建造可能。
- 秦始皇帝が嶺南を制圧した時期に、番禺(現在の広州)の秦軍が、バトナム平定のために多数の標準型の船を建造した。歴史的には、この時の遺跡とされる。

造船所遺跡



滑走台遺構

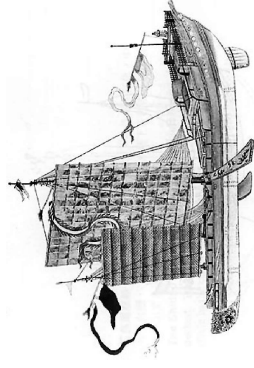
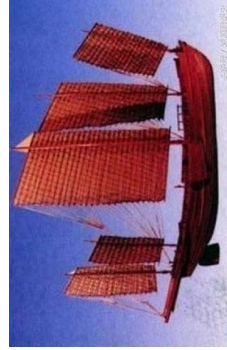
現代の滑走台  
四国ドック㈱HPより

木材加工工場

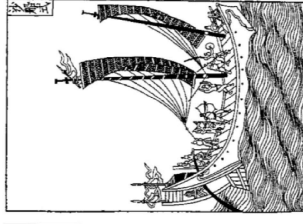
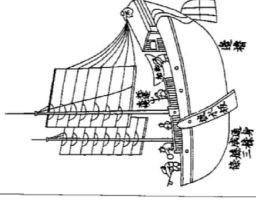


## 中国の帆船の記事

- 船舶概観 | 中国四大古船 2017-02-19 由 海洋探秘 發表于 歴史 <https://kknews.cc/history/p85m2gz.html> 訳責丸地
  - 帆船は、中国の古い海船の船型の一つで、浅い水深に適合し、海難の多い航路を航行し、この帆船と云う名を得た。南北朝時期(439年~589年、隋が統一するまでの期間)に、朝鮮と日本へ航行する船はこの種類。唐・宋時期に、基本的な発展があり、型が定まった。明代に至り「帆船」の名称と成った。
  - 帆船は船底が平で、吃水が浅い。潮が退いた時にも浜にも平らに置けることができ、浅瀬に強い平底船と言われた。帆船は、長江の河口以北の特に江蘇省の沿海および渤海の水深の浅い海域で用いられた。帆船は、一般的には、帆柱が**本有り**、**長方形の縦帆**を掛ける。**船の両舷に披水板**を用いる。これをもち推進し、櫂で操縦する。水深の深い所に到着すると帆走する。船は、舵と風下側の披水板を共にも上げることになり、オールで推進し、櫂で操縦する。(横流れ防止用) **帆は昇降が可能**。水深が浅い海域にあつては、披水板と舵を船底より下に降ろす。これをもって高い操舵性を持ち横流れを回避する。又、**向かい風の帆走の航行能力も向上する**。20世紀に至っても、60年代には中国沿岸では、少なからずの数の帆船が有った。
- 中国古代的戰艦 2016-12-08 由 煮酒君 發表于 歴史 <https://kknews.cc/history/jvejr66.html> 訳責丸地
  - 歴史を振り返ると、現代の中国の造船業界は世界に遅れをとつてゐるが、古代の中国の造船業界は、常に世界をリードしてきた。
  - 余姚市、浙江省の考古学的発見によると、中国の造船業の現在の歴史は7000年以上も続いています。**春秋時代と戦国時代に、造船業はすでに一定の規模を持っていた**。当時、越国家の水軍には特別な造船所、船の宮殿がありました。漢王朝では、州が設立した大規模な造船工場では、様々な種類の軍艦、公用船、航海船を生産することができた。
- 5帆柱の沙船
  - 帆船はまた「四角い船頭・船尾」と言つて、船頭・船尾の甲板が広々と高い、船体は深く小さくて、吃水が浅くて、後部は船尾が水面を出ている。吃水の浅さと四角い船尾が水の抵抗の抵抗力の大きい欠点を補う。その船体が大きいので、より多くの帆柱を設けることができ、より多くの帆で、流れに逆らつて舟を航行させることができます。船倉は防水隔壁を採用して客室をあげて、沈没しにくい性能を発揮。多くの貨物を積載、海船と軍艦はこのような船型を用いる。**帆船は殷商時代にその原形が現れ、後世の絶えざる進歩を通じて宋の時に普遍的になり、制作技術が定型化した**。歴史の海を走る 中国造船技術の航跡 図説中国文化百華



國都沙



## 5. 「王宮に行かず、王に面会しなかった」論

- 邪馬台国論を説く研究者の中には、声高に、
  - 「魏の使者は、途中までしか行っていない。」
  - 「女王国に行き会っていれば、こんな中途半端な旅程は書かない。」
 ✓ この説に同調する説も多い。
  - ☆ ならば、魏の使者が罰せられた記録があるか？ 無い。
  - 魏と倭国の外交関係と使節の目的を理解すれば、  
目的地に行かず、目的を達成しないとする説は、意味が無いもの。
- 邪馬台国論者が、魏志倭人伝の邪馬台国への旅程の解明が、うまくできないことから、設問である「邪馬台国への道筋」自体を否定する説
  - 検討にも、値しない説。
- 自分には、この謎が解けないと分かったなら、「解けない」というべきで、
  - 設問自体を愚弄することは、止めてもらいたいもの。
  - ✓ イソップ童話のキツネの云った「酸っぱい葡萄」と同じこと

## 6. 運輸・旅程の常識

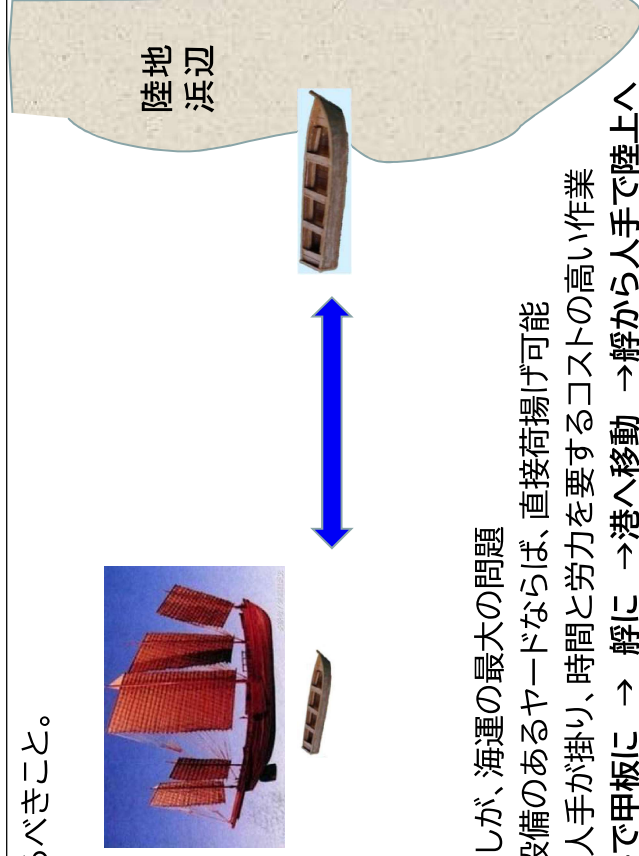
- 旅程の計画段階で、魏の使節が知るべきこと。

- 概略の行程
  - 経由地
  - 距離(経由地間)
  - 所要日数
- 危険度
  - 装備・軍備

- 船と陸行

- 船便を使うときの常識
  - 船への積み込み・積み下ろしが、海運の最大の問題
    - 現代ではクレーンの設備のあるヤードならば、直接荷揚げ可能
    - 古代～近代：最も人手が掛り、時間と労力を要するコストの高い作業
      - 船倉から人手で甲板に → 舳に → 港へ移動 → 舳から人手で陸上へ
    - 積み込み・荷揚げは、最小回数（途中で下ろし、再度積み込むことは有りえない。）

- 目的地に一番近い処まで、船で行くこと。



## 邪馬台国の港

- 魏志倭人に記された港は
  - 邪馬台国の主要な、設備の整った港 → 最大の港
    - 女王の使いが出航する処
    - 外国からの使いが入港する処
- 良港とは？
  - 防風・防波
  - 貨物の積み下ろしが容易
  - 船舶の入出港が安全
  - 最終消費地に近いこと
- 魏の使者の到達した港は？
  - ✓ 女王国へ最も近い港
  - ✓ 最も経済活動が盛んな地域に隣接していること
- 後背地に人口の多い栄えた地帯がない港は、
  - 地形的に良好なであっても、魏の使者の到着した港では有りえない。
    - 呼子付近、名護屋付近は、後背地に栄えた地域は無く、適切な上陸港では無い。

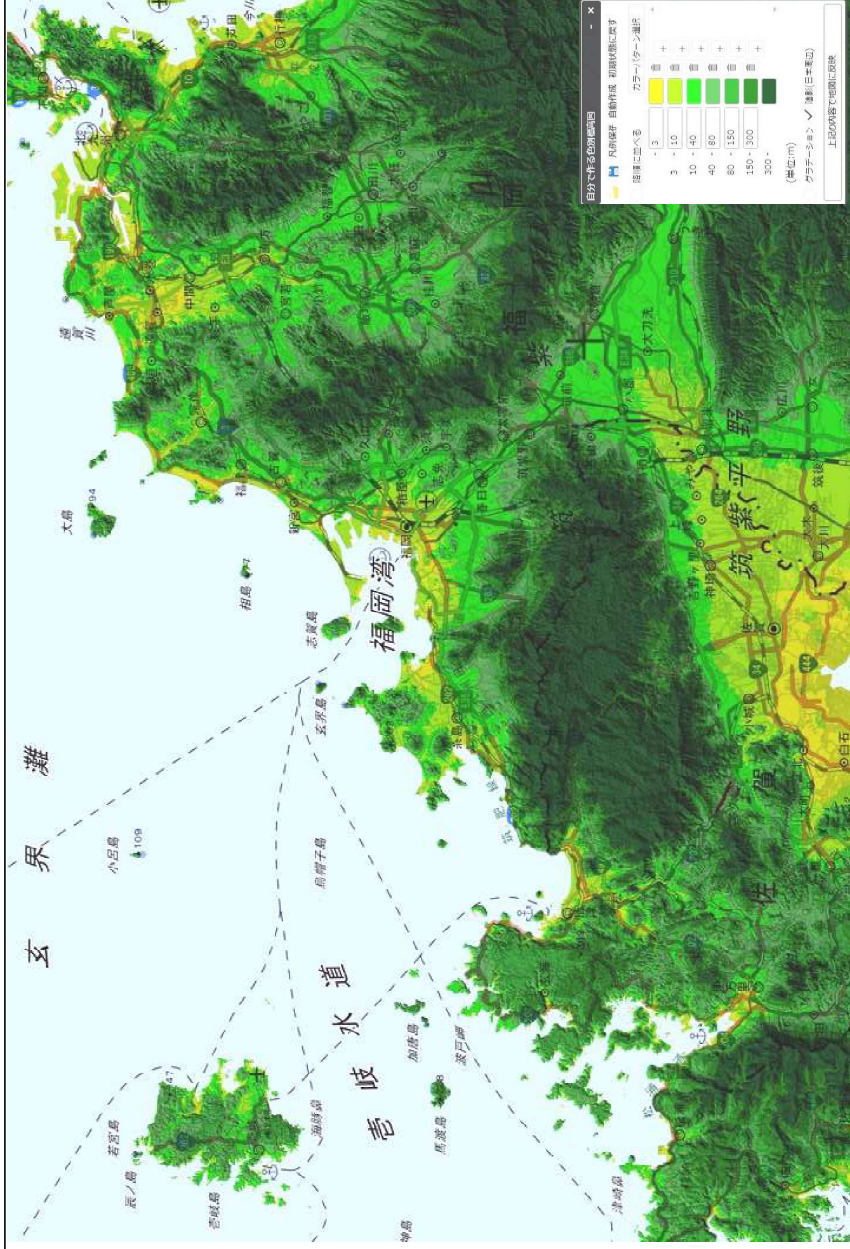
## 韓国横断コースは有り得るのか？

- 帯方郡から韓半島の陸地に行くルートは？
  - 韓国内の陸上通行は、危険では？
    - 同6年(245年)郡内の韓族が帯方郡を襲った。これを弓遷と楽浪太守の劉茂が兵を興して討ち、魏軍は韓族を滅亡させたが弓遷は戦死した。
  - 狗邪韓国から九州へ渡る船を、  
どうやって調達したのか？
    - 韓国に、大規模の使節団を運べる  
大型船舶を提供できる国が有った？
  - 水行と記述されたものを、陸行とすべき理由が無い。
    - 韓国横断コースは、有り得えない。



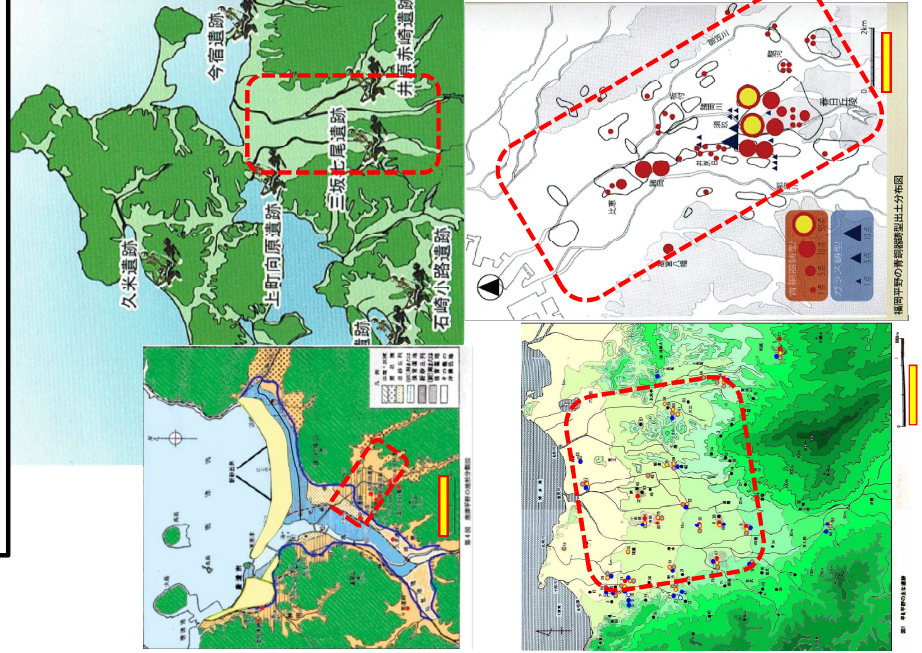
帯方郡治から邪馬壹国までの全行程図

# 5.古地図 --現代の地図--



現代の地図で、玄界灘に面した平坦地を確認する。

# 7：古地図（地形）



# 遠賀川の地図は 1/2 のサイズ

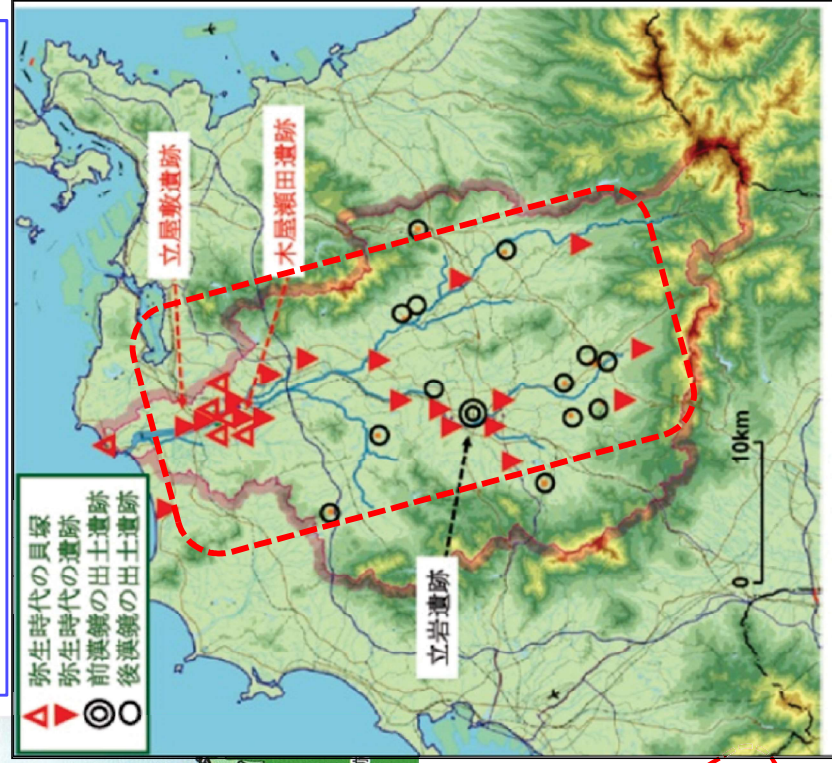
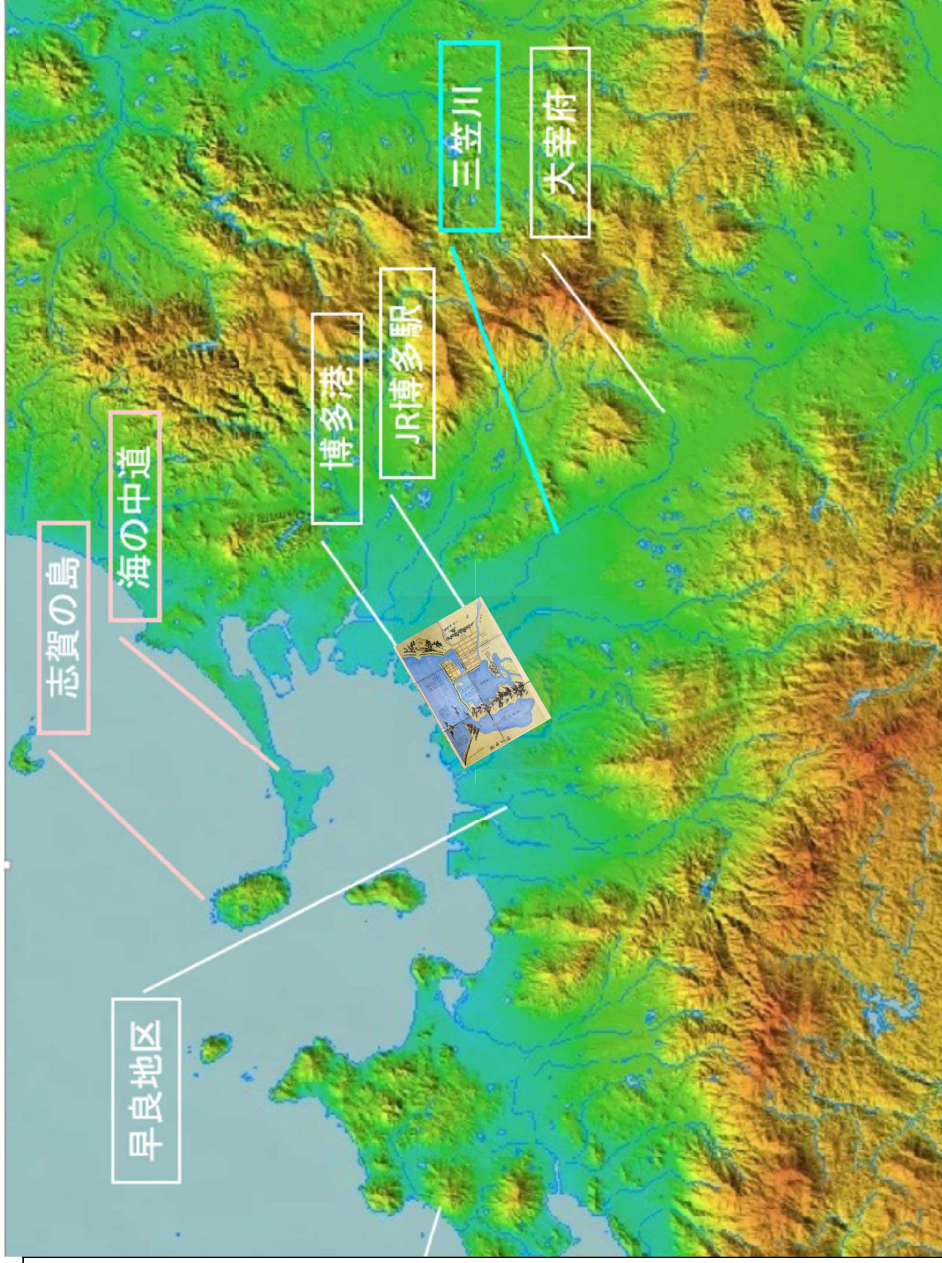


図-5 遠賀川流域の弥生時代の遺跡の分布  
（「遺跡位置図/遺跡略年表<sup>2)</sup>」を元に作成）

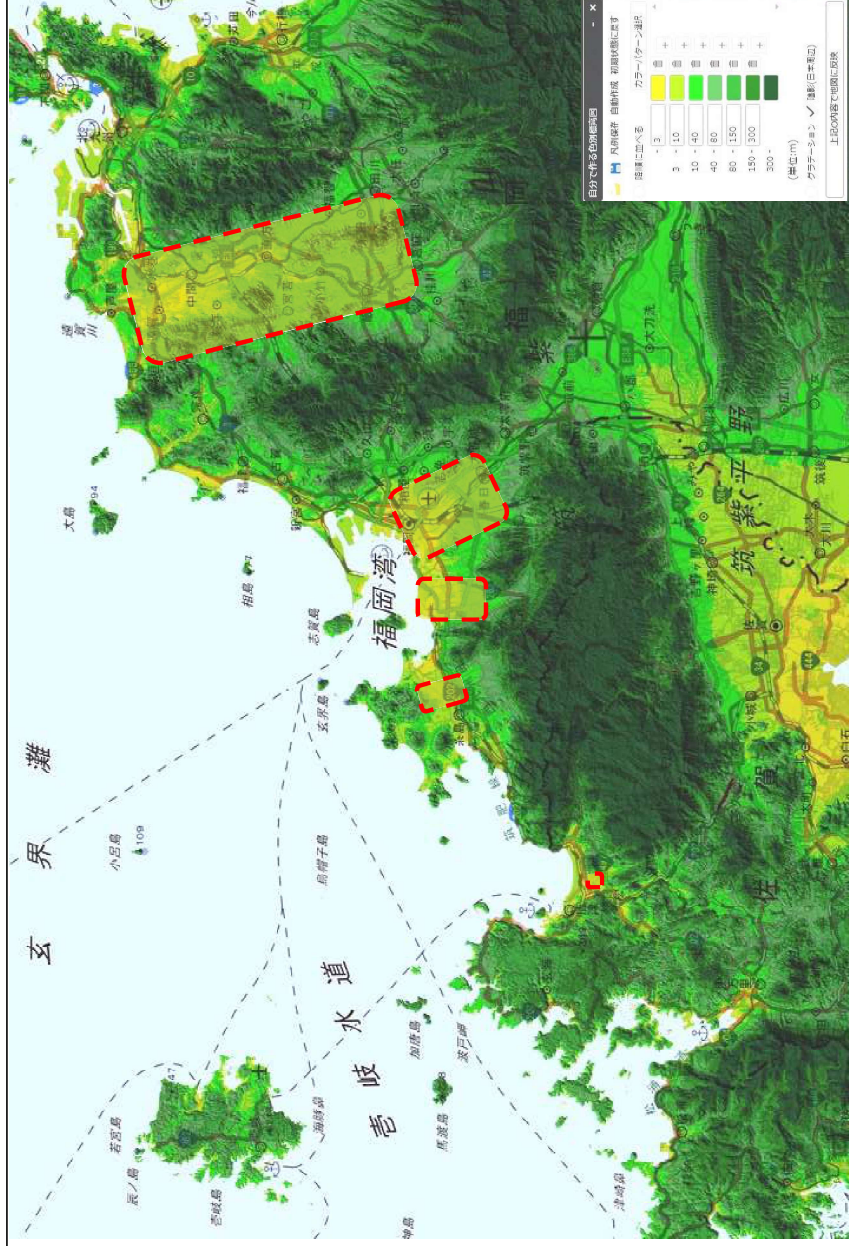
## 博多港 古地図



博多の港は平安時代の末期まで大型帆船の入港可能な良港だった。

那乃津・那珂津などと呼ばれ、古代から外国貿易港

## 5.古地図 --現代の地図--



現代の地図で、玄界灘に面した平坦地を確認する。

## 8. 人口推定

- 邪馬台国の人口は？
  - 魏志倭人伝に記された7か国(対馬・壹岐・末盧・伊都・奴・不弥・邪馬台国)
    - 戸数合計10万戸 ・ 1戸平均5人と仮定し、50万人
  - この人口が多いのか少ないのかが議論される。
    - 1戸平均は10人とすべきとの議論あり、その場合、人口:100万人
- 比べられる人口は、主に、小山修三氏の1978年の論文とその修正版の数値

先史時代の人口		[Koyama 1978: 56] に訂正を加えた。					
	早期	前期	中期	後期	晩期	弥生	土師
北東	2000	19200	46700	43800	39500	33400	288600
関東	9700	42800	95400	51600	7700	99000	943300
北中	400	4200	24600	15700	5100	20700	491800
中部	3000	25300	71900	22000	6000	84200	289700
東海	2200	5000	13200	7600	6600	55300	298700
近畿	300	1700	2800	4400	2100	108300	1217300
中国	400	1300	1200	2400	2000	58800	839400
四国	200	400	200	2700	500	30100	320600
九州	1900	5600	5300	10100	6300	105100	710400
全国	20100	105500	261300	160300	75800	594900	5399800

年代(年前) 8千 5千 4.3千 3.3千 2.9千 1.8千

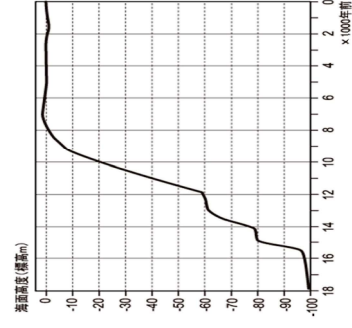
- 弥生時代の全国人口は、約60万人。九州の人口は約10万人
- 邪馬台国の人口50万人~100万人は、小山論文の数値からはかけ離れている。
  - 魏志倭人伝は、少なくとも5倍~10倍のサバを読んでいる。
  - 虚偽の人口報告の理由を、検討すると、 $\times \times \times \times \times$ となる。との論が多出。

## 小山修三氏の人口推定

- 小山修三氏が、初めて、理論的な人口推定を提示。これは、画期的成果。
  - その根拠は、
    - その方式は、基本的には、一定の期間、一定の範囲に存在する遺跡数を数え、そこに住む人数を一定の手続きで決めることにより、人口量を求めるというものである。
- 従来の人口推定に比べ、理論的・科学的だが、果たして、信頼できるのか？
  - 総人口2万の縄文早期(1万4千年~8千年前)の遺跡は何処にあるのか？
    - ほとんどの遺跡は海拔80m以内の地域に有ったはず。
    - その遺跡は、発掘されているのか？ 答えは、“NO”
      - 現代の日本人人口の多くは海拔80m以下の地域に居住する。
        - この住人の数を無視して、人口論は成り立つのか？

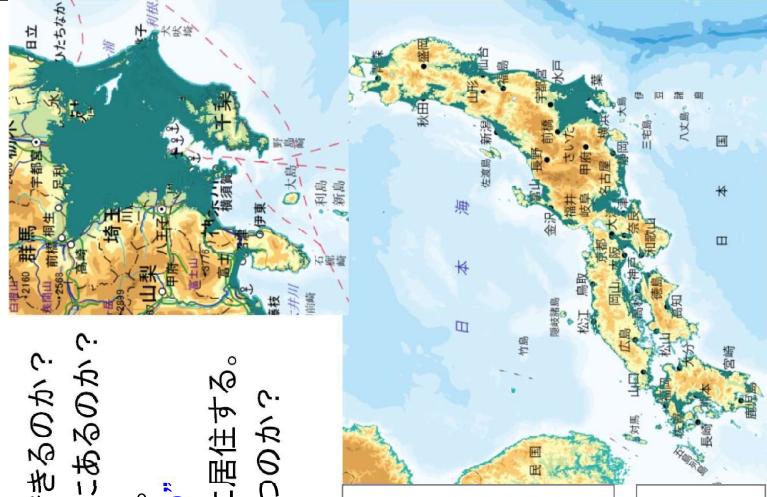


第14図 中瀬・穴運動地域の縄文前期の海水準変動  
大田WEBSS, ユーリアム書庫より



右・右上の2図は、海拔80m以下を青色にした地図。この地域お抜きに人口論は意味がない。

関東地方の4328万人の内、何人が青の地帯に住む



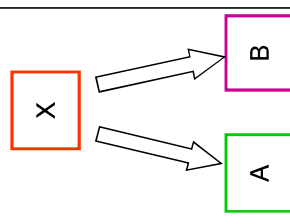
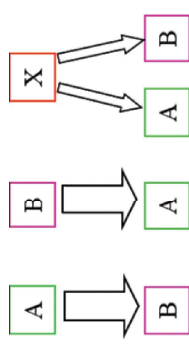


## 小山修三氏の人口推定 その2

- 従来の人口推定に比べ、理論的で、科学的であるが、その方法論から来る、限界を知った上で、小山修三の数値を利用すべきだと考える。
  - { 留意すべき点 }
- 縄文時代 縄文海進以前に、多くの住居は海拔80m以内にあっただけ。 (海産物は主要な食料)
  - 現在カウントされている遺跡は、当時の海拔80mまでの高地(海岸から遠い)のもので、主要な遺跡は、海岸に付近にあっただけだが、カウントされていない。
  - 従って、早期:2万人の数は、少なくとも、5-6倍程にすべきと考える。
- 遺跡の数 : 1978年までに報告された遺跡の数を採用。
  - それ以降の発掘の成果は基本的に、反映されていない。
  - (それ以降の発掘件数は、極めて多い。)
  - 1978年板付け遺跡発見、菜畑遺跡などはそれ以降の発見、吉野ヶ里遺跡は1986年以降。
  - 1978年以降に大きな発見・発掘が続出する。 その意味では、小山論文は見直しが必要。
  - 1978年以降に発掘された弥生の遺跡の数は、それまでと同数であったならば、人口も2倍ほどに計算上なるはず。
  - 特に北九州の遺跡数の1978年以降の発見が大きいので、北九州だけでも、弥生末期に50万人の人口が有ってもおかしくない。
  - 魏志倭人伝の戸数の記述を、適正でないとの確証は、小山修三氏の論文からは言えない。

## 9. AB二か所で同一物件発見 何と理解するか $A \Rightarrow B$ $B \Rightarrow A$

- DNAの件で話したこと
  - 地点AとBで同じタイプのものが見つかった場合
    - AからB又は、BからAへと、断定してはいけない。
    - 別の地点からAとBへ移動する場合もある。
- 弥生土器と弥生文化の話で、同様のことが発生している。
  - 朝鮮半島と同一の形式の土器が発見された 『事実』
    - 『結論』 弥生土器と弥生文化は、朝鮮半島から来た。 → ????
    - 現代の考古学の常識で、発掘に関わる報告書には、このように記載されている。
    - 青銅器に関しても同様の記述となって居る。
  - 魏志東夷伝の記述を読むと、
    - 朝鮮半島には、倭人の国より進んだ優れた国の記述がない。
    - 朝鮮半島の土器・青銅器は、どこから来たのか？
    - 日本に来る前に、朝鮮半島に伝わったとする根拠は有るのか？
  - 大陸から倭人が、
    - 日本と朝鮮半島南部に渡来したとする。 この場合：
      - 初期の土器・青銅器は、朝鮮半島と日本では同一のタイプのものが出土する。
        - ✓ 後の古墳時代には、日本から朝鮮半島南部へ前方後円墳が、伝播した。
      - 同じ倭人が日本と朝鮮半島南部に移住し、稲作文化をもたらした。
        - 韓国語の米作に関する単語の多くは、日本語の単語と同一。
        - (日本から韓国へ稲作技術が渡った証拠では???)



## 以上から 旅程を検討する場合に留意すべきこと

1. 使節団の規模は、最低500人～2～3千人。この規模の団員が動くことを前提に。
  - ✓ 多くの荷物・人員の移動が可能なコースが必須
  - ✓ 大型帆船が利用されるコース
2. 実行前に、十分な計画が練られたこと。(コース・距離・所要日数など)
  - ✓ 水行・陸行 上陸地点 所要日数・距離 危険度
  - ✓ 旅程は、主要メンバー＝人員数の最も多いグループのもの
    - ✓ 調査などで別行動をとるメンバーのコースは、別扱い。
3. 魏と倭国の友好関係から、当時もとも安全・適切なコースをとったと推定。
4. 九州に上陸地点から、最短の陸路で女王国へ到着。(船舶で、女王国の最も近くの港へ)
5. AD240年の梯儕一行の残した記録は、AD247年の張政派遣の時に使われ、確認された筈。  
(緊急の援軍要請に答えた張政の派遣であったことから、最短コースのほはず、  
虚偽・作為の有るコースであったとすると、張政の派遣時に、問題が発覚する。)

## 課題

- 検討してきた条件で、旅程の見直しを行う。
- 最初の課題として
  - 唐津上陸説に根拠は有るのか？
  - 九州上陸地点は何処か？
- 外の課題として挙げられることは？
  - 景初2年3年の問題
- 次回 9月には、最初の課題のどちらかを検討したい。